

大阪樟蔭女子大学における初年次教育改革の方向性と課題 (I)

白川哲郎
有田節子
小森道彦
藤澤良行
福田敦志

要旨

本論文は、2006年度春期に開講された白川哲郎助教授による「基礎ゼミA」実践を批判的に考察することを通して、大阪樟蔭女子大学における初年次教育の進むべき道と課題を明らかにしようとしたものである。その際、当該の授業に対して2回の参与観察を行うとともに、受講した学生に対するインタビュー調査を行うことで、教師の視点と学生の視点の両面から複合的に白川実践を考察したことが、本論文の特徴の一つである。

本論文は以下のように構成されている。まずはじめに、本学のカリキュラムへの「基礎ゼミA」の導入の経緯を踏まえつつ、その位置づけについて述べた。次に、授業者である白川自身によって「基礎ゼミA」の目標、内容、方法を実際の授業に即して詳述した。また参与観察での経験に基づきながら、学生同士の関係性の深まりや教師の指導性に注目して白川実践における指導の特徴を指摘した。さらに、受講した学生へのインタビュー調査を批判的に分析することで、学生にとっての白川実践の意味と意義を明らかにした。

以上の考察を通して、本学の初年次教育改革の課題として、「学生の居場所づくり」「知的充実感を味わえる日本語教育の取り組み」「統一テーマの設定」の重要性を提起した。

はじめに

本稿は、大阪樟蔭女子大学（以下、本学）の教員有志による団体「Fプロジェクト」（以下、Fプロ）で継続的に行っている授業見学の一環として、2006年度春期に行われた白川哲郎助教授（日本文学文化史学科）の「基礎ゼミA」の授業について報告・検討を行うものである。

Fプロにおいても、最近の学生の変化に対応した初年次導入教育の重要性は頻繁に話題に上り、最近の活動の中心的なテーマの一つである。白川の「基礎ゼミA」の検討に入る前に、2001年度から2006年度まで「基礎ゼミ」として行われていた授業が、設置の経緯も含めてどのようなものであったのか、ここで簡単に総括してみよう。

本学の「基礎ゼミ」は、2001年度改組に伴って共通科目としてスタートし、今年度で7年目になる¹⁾。「基礎ゼミ」の設置を含め大規模な共通科目のカリキュラム改正が行われた当時より、既

に大学生の「学力低下」は学内的、のみならず社会的にも問題になっていた²⁾。この改組では、大学全入時代を射程に入れて、いかに質のよい卒業生を社会に送り出すことができるかという観点から、共通科目全体でベーシックだが確実な「技術」と「教養」をもたせることがねらいとされた。そのため共通科目群は、いわゆる教養科目の充実とともに「基礎ゼミ」「外国語」「情報処理」「スポーツ・健康科学」などのスキル科目にも重心がおかれ、「基礎ゼミ」はこれら4つのうちの一つの大きな柱として構想された。

様々な検討を経て、内容的には、「基礎ゼミA」では大学教育の根幹に関わる日本語の運用能力向上を目指し、「基礎ゼミB」では専門の導入教育を、できるだけ学生との双方向性をもって行うという原則が立てられた。さらに、運用は各学科に一任し、随時実際の運用状況を持ち寄って改善を図るという地点からスタートすることになった。この後、各学科で様々な試行錯誤が行われ、現在の形に至る³⁾。

全体としては、「基礎ゼミ」は先に述べた「原則」にしたがって、各学科で独自に工夫がなされ改善が図られてきた。この4年間の実際の運用を通して「できること」「できないこと」の区別が明白になり、科目内容もさることながら、とくに入学後間もない一年生の把握という点で、必要不可欠な科目として機能するようになったと思われる。そしてより有効に機能を果たすための第一歩として、この4年間の間にも変わり続ける入学生にさらに対応するために、「大学生入門」と題された文書が配付され、「基礎ゼミ」の共通部分として最低限確保すべき内容が示された。

総論的には順調に進行した「基礎ゼミ」であるが、問題点がないわけではない。それは日本語の運用力をつける、という点である。当時『日本語練習帳』(大野晋著、岩波新書)などの日本語の見直しブームがあったせいで、この類いのワークブックをテキストに使えばよいという発想もあった。しかし、これらの個別の表現や技術を習得したところで、残念ながら日本語力、とりわけ、アカデミックな場面での日本語運用力の直接の向上にはつながらない。授業中の発表、指導教員とのディスカッション、そしてレポートの作成には、根拠に基づいた主張ができることが求められる。ところが、自分の感想を述べること、書き綴ることを奨励する小中学校における教育の影響が依然として力をもっているせいか、一年生はもちろんのこと、二年次以降の学生についても、自分の感想を述べるだけで、根拠に基づいて自分の考えを述べることのできる学生はきわめて少ない。

アカデミックな日本語力、さらに思考力の向上のためには、やはり、ひとつのまとまった内容に基づいた(content-based)日本語活動が必要であり、かつ、その内容は、冒頭に述べた本学の共通教育の基盤にある「教養」と「技術」の習得につながることを望ましい。

以下の章で報告・検討される白川の「基礎ゼミ」の授業は、平成13年度に構想された「基礎ゼミ」の枠組みの中で、新入生のオリエンテーション機能も持ち、かつ、一つの内容に基づいて相互学習が可能な日本語教育でもあるという、典型的な「基礎ゼミ」のあり方を示すものではないかと思われる。参与観察は2006年4月28日、及び7月7日の2回行われ、さらに、7月28日に「基礎ゼミ」の受講生に対して口頭でインタビューを行った。

(小森、有田)

1. 「基礎ゼミ A」の授業実践報告

(1) 日本文化史学科における「基礎ゼミ A」の位置付け

日本文化史学科の「基礎ゼミ A」は、4年間の大学での学びを充実したものとするため、少人数クラス編成のもと、受講生自身の発表や討論を通じて、講義を理解する能力や、自分で調査・発見しながらレポートを完成する能力、自分の意見を他者に正確に伝える能力などを獲得させることを目的としている。これを共通理解としながら、授業の具体的な内容については、各担当者に委ねられている。

2006年度春期は、新入生を3つに分け、1クラス9名で授業が行われた。白川が担当したクラスでは、「今後4年間大学で学んで行く上で必要となる“読む(理解する)”“考える(問題の発見・追究・解決)”“伝える(論理的にまとめる、表現する)”といった、さまざまな能力・技術の基礎を学ぶ」という目標を掲げ、次節で述べるような内容の授業を行った。

(2) 2006年度春期「基礎ゼミ A」(白川担当)の授業記録

①今学期のテーマ

白川が担当した「基礎ゼミ A」では、「樟蔭ものがたり」と題して、自分たちが学ぶ“樟蔭”についてもっとよく知ろう、というテーマを設けた。学生に配布したプリントでは次のように説明している。

自分たちが学んでいる“大阪樟蔭女子大学”とは、どのような歴史や特徴を持った大学なのか、あなたは“樟蔭”のことについてどれくらい知っていますか。

“樟蔭”について、知りたいと思ったこと、疑問に思ったことなどを取り上げ、それを調査追究し、謎や疑問を解き明かし、次にはそれを他の人にも紹介しましょう。

自らが学ぶ大学(学園)を共通の素材として、前述の「基礎ゼミ A」の目的を達成させることを目指した。加えて、自らが学ぶ大学および学園の歴史や特徴について知ること、本学で学ぶ意欲を喚起することをも意図したところである。

なお、白川がこのテーマで基礎ゼミを行ったのは、2004年度春期・秋期、2005年度春期に続いて4期目となる。

②授業の内容

今期行った講義の概要については、第1表「2006年度春期『基礎ゼミ A』(白川担当)の授業計画と実際の授業内容」に示した。以下、この表に基づきながら、今期の授業内容を紹介する。なお第1回目は、大学全体で新入生を対象に実施される学外オリエンテーションのための学科ガイダンスの時間とされたことから、第2回目以降が主たる対象となる。

第2回目の授業では、学外オリエンテーションの課題(レポート)を回収した後、授業計画を説明した⁴⁾。次に、次回実施する自己紹介の材料を準備させるため、「(CUEシリーズ(自己発見・自己表現シート))はじめまシート」⁵⁾を配布し、その内容に沿って作業させた。自己紹介

第1表 2006年度春期「基礎ゼミA」(白川担当)の授業計画と実際の授業内容

回数	授業実施日	当初の授業計画	実際に行った授業の内容
1	4月7日	学外オリエンテーションガイダンス	学外オリエンテーションのための学科全体のガイダンス
2	4月21日	学外オリエンテーション課題提出	学外オリエンテーション課題(レポート)の回収
		授業計画	授業計画についての説明
		“自己紹介”のための準備	「はじめまシート」の配布、記入
③	4月28日	“自己紹介”する	自己紹介
		報告の順番を決める	報告順番の決定
4	5月12日	『樟蔭ものがたり』を読む①	要約① 『樟蔭ものがたり』の小項目を60字で要約させる(*全ての項目についての完成を宿題とする。)
		樟蔭の“歴史”を実感する①	記念館・登録有形文化財への登録記念展示を見学(※昭和20年春卒業生のお話を聞くことができる。)
5	5月19日	『樟蔭ものがたり』を読む②	要約② 1)要約について概説*プリント利用 2)要約の練習問題を行う 3)『樟蔭ものがたり』の要約文(400字)作成させる(*小項目の要約文を参考として完成を宿題とする。)
6	5月26日	樟蔭の“歴史”を実感する②	ノートテイク 1)樟徳館紹介ビデオ(15分)を利用してノートテイクの練習 2)ノートをとる上での注意
			「大正の女学生」(学園所蔵DVD・前半)視聴
7	6月2日	知りたいことは何? ーテーマを考えるー	「大正の女学生」(学園所蔵DVD・後半)視聴 テーマを考える(KJ法) (第1段階)2グループに分かれて、ブレインストーミングを行う
8	6月9日		(第2段階)KJ法を行い、前回貼りだした項目をテーマ毎に収束させる
		テーマについて調べる ーテーマの調査・追究ー	資料検索の方法 研究室のノートパソコンをTV画面に接続して、図書館の検索システム、レファレンス・リンクを紹介(→文献リスト[大テーマ:女子教育/中テーマ:各自設定]の作成を宿題とする。)
9	6月16日	報告する準備をする ーレジュメの作り方ー	レジュメの作り方 1)レジュメについて概説*プリント利用 2)過去の学生のレジュメを素材にレジュメの作り方を練習
		「まとめレポート」について	報告予定テーマを発表 「まとめレポート」について指示
10	6月23日	報告する1	報告① 樟蔭女学校の授業
			報告② 樟蔭の海外交流今昔
11	6月30日	報告する2	報告③ 樟蔭の体育について
			報告④ 大阪樟蔭女子大学の服装史
⑫	7月7日	報告する3	報告⑤ 樟蔭の学則と規定の今と昔
			報告⑥ 校名と校章について
13	7月14日	報告する4	報告⑦ 大阪樟蔭の行事
			報告⑧ 女子教育の歴史～樟蔭ファッションに隠された秘密～
14	7月21日	報告する5	報告⑨ 開校時の樟蔭～設立の苦労と当時の建物～
		報告の反省	※毎回、報告者には「自己評価カード」、それ以外には「相互評価カード」の記入を課した
⑮	7月28日	講義のまとめ	
		「まとめレポート」の提出《締切》	「まとめレポート」の回収 ※Fプロメンバーによる聞き取り調査

※「回数」欄○数は、Fプロメンバーによる参観等が実施された授業。

にこうした共通のフォーマットを利用するのは、受講生が、ある一定の流れの中で自分について振り返って浮かび上がってきた話題を紹介する形となることから、通常とは異なった自己紹介となり、受講生が相互に、また教員が受講生と話をする際のきっかけ、話題を得やすくなると思ったことによる。

第3回目の授業は、受講生による自己紹介である。欠席した1名を除いて、白川を含めて受講生が順番に、「はじめまシート」を利用した自己紹介を行った。また授業の最後には、第10回目以降の授業で行われる報告の順番をくじ引きによって決定した。早い段階で報告順番を決定するのは、受講生に“報告をしなければならない”という意識を持たせようと意図してのことである。

第4回目から第6回目までの授業では、本学とその母体となる学園の歴史について、各種の方法を使用しながら紹介することを通して、(a)文章の要約、(b)ノートテイクの練習を行わせた。

(a)文章の要約には、入学手続きの際、新入生に配布される樟蔭学園制作の『樟蔭ものがたり』と題した小冊子を利用した。この冊子の記事を素材として、第4回目の授業時には第一段階として、記事の項目毎に60字以内の要約文を作成させた。授業では、最初の2項目についてそれぞれ作業し、出来上がった要約文を何名かに読み上げさせた上で、その項目で欠かすことのできない内容などについて指導した。授業時間中に全ての項目について作業を完了することは出来ないので、残った項目については次回までの課題とした。第5回目の授業では第二段階として、まず要約を行う際に注意すべき点を指導し、練習問題を行った後、『樟蔭ものがたり』の記事の項目毎に作成した60字程度の要約文をもとに、400字以内で記事全体の要約文を作成させた。この要約文は、授業時間内での完成を目指させたが、完成しなかった受講生には次回の提出を義務付けて授業を終了した。

(b)ノートテイクの練習は、第6回目の授業で行った。学園から提供を受けた樟徳館⁶⁾を紹介した番組⁷⁾のビデオテープを利用して行った。まず番組を視聴しながら、受講生に実際にノートをとらせた。次に番組の内容に関する質問をし、内容について正確にノートできているかどうか確認させた。さらに筆者がとったノートを画面に示しながら、ノートをとる際のアドバイスをを行った。そして再度、質問した箇所や樟徳館そのものの見所などを確認しながら、番組を視聴した。

ところで、第4回目から第6回目までの授業には、講義後半で行わせる報告のテーマを考えさせるために、予備知識を提供するという目的も含まれていた。文章の要約の練習素材として学園を紹介する小冊子『樟蔭ものがたり』を利用することで、学園の歴史のアウトラインを把握させたいと考えた。また、ノートテイクの素材として樟徳館を紹介する番組を利用することで、学園に貴重な文化遺産が存在するということを実感させたいと考えた。加えて、第6回目と第7回目の授業では、「大正の女学生」というNHKの番組のDVD⁸⁾を2回に分けて視聴し、大正7年(1918)創立の学園の歴史と特色の一端とを実感させようと試みた。さらに今期は、2006年3月に本学の記念館が国の登録有形文化財となったことを記念して一般公開が行われたのを利用して⁹⁾、第4回目授業の後半にそれを見学し、学園の歴史を語る生の資料に触れる機会を持つことができた。そしてその際、昭和20年(1945)春に樟蔭女子専門学校を卒業された方から学生時代のお話

をうかがうことができたことは、受講生にとって貴重な経験となったと推測する。

第7回目と第8回目の授業では、「知りたいことは何？」と銘打って、報告テーマについて考えさせる作業を行った。この作業は、当初は1回の授業で完結させる予定であったが、それ以前の授業の内容が繰り返してきていたため、残念ながら2回に渡る結果となった。

そこで実施したのは、受講生にK J法を体験させることである。授業ではまず、受講生を2グループに分け、粘着剤付きの付箋を配布した。そして、「樟蔭に関して知りたいこと（興味のあること）」を出来るだけたくさん付箋に書き出し、手元に並べるよう指示した。作業時間をしばらくとった後、両グループに模造紙を配り、それに各自が書きためた付箋を順番に貼り付けさせた。ここで授業の終了時間が来たため、いったん作業を中断した。第8回目の授業では、まず前回付箋を貼った模造紙を改めて見直させ、さらに思いついたことを前回同様に貼り付けさせた。そして次に、グループ毎に貼り付けた付箋に書かれた内容を見渡して、内容の類似性に注目しながら、それらをいくつかの小グループにまとめさせた。さらにその小グループにタイトルを付けさせ、それらの親近性に注意しながら、線で囲んだり、結んだりすることで、小グループの関係を図示するよう指示した。一連の作業が終了した段階で、両グループの代表者に、もう一つのグループの受講生に対して、自分たちのグループが作成した図の概要や特徴的な内容を紹介させるなどした。

第8回目授業の後半では、「資料検索の方法」と題して、ノートパソコンをテレビ画面に接続し、本学図書館のホームページを開き、図書館の文献検索システム、およびレファレンスリンクから情報収集する方法を紹介した。なお、こちらがパソコンを操作して使い方を紹介するだけでは不十分と考え、受講生には、検索システムを利用して「女子教育」に関する文献リストを作成する課題を与えた¹⁰⁾。

第9回目の授業では、次回からの報告に向けて、レジユメの作り方について指導した。まず、レジユメを作成する上で注意すべき点、特にレジユメとレポートとの違いについて確認した。次に、過去のある学生が作成したレジユメ¹¹⁾を素材として、受講生各自にそれをより良いレジユメとして作り直させる課題を与えた。また、授業の最後には、最終回の授業で提出させる「まとめレポート」の要領についても指示した¹²⁾。

第10回目から第14回目の授業は、受講生による報告である。受講生が行った報告題名については、第1表の一覧を参照されたい。過去3回の同じテーマを掲げた基礎ゼミと比べると、今期の受講生の報告は、現在の状況と過去の状況とを比較するものが多かった。また過去3回に比べて、各報告に対して質問が非常に多く出されたことを指摘できる。

ところで、白川が担当する基礎ゼミでは、受講生の報告について、自己評価と相互評価とを行わせている。自己評価は、文字通り、自らの報告について各自に振り返らせるものである。一方、相互評価は、互いの報告に対して、レジユメ、および口頭発表と質問への応答に関して互いに評価させるものである。その詳細は、後掲の資料を参照されたい。なお、相互評価の結果は、整理し直して報告の次週の授業時に、報告者本人に手渡していた¹³⁾。

第15回目の授業は、今期の受講生の報告に対する全体的な講評を行い、「まとめレポート」を回

収して終了した。残った時間は、受講生に対するFプロメンバーによる聞き取り調査に充てた。
(白川)

2. 参与観察から言えること—学生間の交流を中心に

(1) 第3回の授業に関して

まず気づかされることは、「基礎ゼミA」に参加する学生同士のチームワークの良さである。授業として3回目という比較的早い時期にしては、お互いの人間関係がほぼ出来上がっていることが、この授業に良い影響を与えている。これには4月中旬（第1回目の授業が行われた後）に1泊2日の学外オリエンテーションがあり、学科内での学生同士のまとまりができあがる素地がすでにあつたと考えられる。少なくとも顔も見たことがない、あるいはこの授業以外で話をしたことがないという状態ではなく、ある程度お互いを知ることが出来る状態でこの回の授業を迎えていること、そして何でも話せて何でも質問が出来るような雰囲気作りがその前提にあることは間違いない。

この仲間意識の強さは非常に重要で、学生一人一人の今後4年間の学びに大いに寄与する部分であろう。例えば、プレゼンテーションの最中に言葉が出てこなくて詰まったりしたときに、まわりの学生から「がんばれ」と声がかかるところに仲間意識の萌芽が見て取れる。

この回の授業の中心は「自己紹介」を全員が全員の前でプレゼンテーションすることであり、全員が発表の元になる原稿を準備して出席している。手がかかりとして「はじめまシート」（1章を参照のこと）を使用して発表のアイデアをまとめる作業がすでに行われていて、それを踏まえてのプレゼンでどれだけの成果が上げられるかが第一の目標である。実際のプレゼンにおいては、発表者が自分の用意した原稿を棒読みにしてしまい、聞き手は退屈してしまう光景をよく目にするが、今回の発表ではほとんどの学生が原稿をそのまま棒読みにすることなく、フォーマットは尊重しつつ、出来る限り自分の言葉で聞き手に分かるように説明をする姿勢が見られたことは非常に良い点であった。

さらに第二の目標として、他の学生の発表を聞いてその内容に対して質問をすることも授業中に要求される。建設的（あるいは批判的）に発表を聞く態度が聞き手として必要になる。発表の中心主題は自分が何に興味を持っているかということなので、お互いをまだよく知り合っていない段階では、発表する人物の意外な側面も表れてきて、その発表は他の学生の関心を大いに引くものになり、その結果内容を深める質問が当然のようにまわりから出され、発表者はそれに答えることによってさらにお互いの理解が深まるという良いサイクルができあがる発表が多かった。

学生一人あたり7～8分で発表、質疑をこなして90分を使用して全員が発表を終わることができた。自分の興味あることが十分に他の学生に伝わったこと、そしてお互いにより深く知り合うことができたという満足感が漂う授業であった。さらに、ともすれば仲間意識は安易な方向に、なあなあ気分にならされてしまいがちであるが、そうならないのは白川がきちんと全体を掌握

しているからであろう。そこには自分は黒子に徹しながらも、スムーズに発表ができるように流れを作り出している白川の力量が光っていた。

（２）第12回の授業に関して

2人の学生の「樟蔭」に関する発表とそれに対する質疑がこの回の授業の中心である。発表する側は終了後に発表に関するワークシートを、聞く側は発表に関するコメントを別のワークシートに記入する義務が課せられる（資料1参照）。いずれも言いつばなし、聞きつばなしにならないための工夫である。

「基礎ゼミA」の内容の中心は、何か自分に興味を持てるテーマを設定してそれに関して自分で文献などの資料を調べ、発表用にレジュメを作成しそれをもとに発表するというもので、そこで必要となるスキルは大学でのこれからの勉学に必須のものとなる。この「基礎ゼミA」に関しては、「樟蔭」をテーマとした日本文化史学科らしい歴史的な視点を必要とするものであり、自分の興味の有りどころとしては一定の「枠」がはめられていて、発表する学生はその範囲内で「面白そうな」テーマを探すことになる。発表の順番が後になる学生は、当然すでに行われた発表を参考にする必要があるので、まずは「何をテーマにするか」に関して絞り込むのに苦労したのだと想像される。しかしその結果として、授業全体の流れを踏まえてそれぞれの学生が自分の発表テーマを考えることで、全体としてより深いまとまりが形成される。このことも学生間の交流の深まりの生み出す効果といえるであろう。

テーマが決まると「いかに」に問題が移ってくるが、「樟蔭」の歴史に関しては、それほど資料が豊富ではないので、限られた資料の中からテーマに関わる部分を探し出す作業が必要になる。資料分析をする過程で浮かび上がる疑問や発見を踏まえて、さらに深く考えを進めることができれば良いのであるが、初年次の「基礎ゼミA」としてそこまで踏み込む発表にならないという残念な点も一部に見られた。しかしこの部分は質疑応答を通して学生自身が痛感するところでもあるので、今後自分の研究に関していかに取り組んでいけばよいのかについての指針となる。

個々人の発表に関しては、レジュメに則りながら、それを読むだけでなく、レジュメに書き込まれていない事項に関しても言及しながら発表を進めていたので、聞き手としても話の流れがつかみやすいものになっていた。その後の質疑に関しては、きちんと挙手をして指名を受けてから発言するという原則が守られつつ、ほぼ全員が自発的に発言をしていた。大学までの教育の悪弊として学生は自ら進んで発言しない傾向が強いが、ここまでの3ヶ月の授業での取り組みの成果がこの自発的な発言スタイルに具現されている。質問内容に関しては、発表の言及が足りなかった部分の補いを求めるものや、発表者の立てた仮説に対する意見表明であったり、互いに互いの意見を尊重しつつ、発表の内容を深める結果になる非常に好ましいものであった。

この質疑応答の際、白川はひたすら進行役に徹していたことも特筆すべき点である。必要な情報を付け加えることも適宜行われていたが、あくまでも発表者を中心にしてできる限り発表者の考えを尊重しようとする姿勢が貫かれていた。さらに聞き手から出されるコメントもきちんと掬い取り、学生間の交流を通してより深い学びへと集団全体を導く配慮が見られた。ゼミという少

人数の形態の授業においてさえ教師と学生の一方のやりとりに終始してしまうものが多い中で、学生同士が交流することでお互いを高め合う現場を作り出せた意味は大きい。

(藤澤)

3. 参与観察から言えること—教師の指導性を中心に

(1) 指導の特徴としての「基本的信頼感」を育む言葉かけ

白川の「基礎ゼミA」を参観した際にとりわけ印象深いのは、学生たちが積極的に発言していること、個人によって発言回数に多少の差はあれ、全員が発言していることである。しかも、相互に発言者の方に顔を向け、うなずきながら自分なりの応答を示すといった関係が学生たちの間にしっかりと育ちつつあることも見受けられる。このことについて、話し合いを積極的にリードしている学生が9名のゼミ生のなかに4人ほどいるという「恵まれた」条件に目を向けることも可能であろう。だが、積極的な学生たちの間だけで議論が進行しているのではなく、ゼミ全体で話し合いが成立しているという実践の事実をその条件だけで説明することはできない。ではなぜ、白川の「基礎ゼミA」においてこのような学生の姿を見ることができたのであろうか。そのことを可能にした白川の指導の特徴を浮かび上がらせてみたい。

まず第一に、自らの発言を否定されないという安心感を学生たちに与えていることに成功しているという点が挙げられよう。学生たちの発言を決して否定せず、うなずきながら耳を傾けている白川の姿勢が、そうした安心感につながっていることは言うまでもないであろう。

第二には、発表者の発言をさらに引き出すような言葉かけを、白川が行っている点を指摘できる。自己紹介を主たる課題とした第3回の授業においては、それぞれの発表者が大切にしているであろうエピソード（「文化祭の思い出」「映画好き」「動物好き」等）に関して、それを補足するように促す言葉かけを丁寧に繰り返している。換言するならば、その言葉かけは「あなたの話をもっと聞かせてほしい」という呼びかけであり、学生たちはその呼びかけに応答しながら自らの言葉を紡いでいっているのである。

だが、安心感はそれだけでは実感することが難しい。正確に言うならば、上記の点だけでは教員と学生の間につながりが生まれても、そのつながりが学生同士の間にも張りめぐらされていくことにはならない。この問題に関して白川は、それぞれの発表者が大切にしているエピソードを手がかりにしながら、学生相互の共通点を学生たち自身に発見させていくことを目的とした言葉かけを行っている。それぞれの文化祭の思い出を尋ねてみたり、映画やTV番組を話題にして交流しようとしてみたりするなど、意識的に学生同士が互いに聞き合い、応答し合うという関係を築いていけるように指導しているのである。

以上のように、学生が最も伝えたいことを的確に捉えて応答していくこととあわせて、学生相互で共通の話題になりうるエピソードに着目させて発言を促していく指導が、白川の「基礎ゼミA」において一貫して展開されているのである。このことは、本学に入学してくる学生たちの自

己への基本的信頼感の低さに鑑みるならば¹⁴⁾、きわめて重要な指導であると考えられる。入学して初めてのゼミ形式の授業において、教員にだけでなく学生の間で受けとめられ、かつ自らと同じところを他者のなかに発見していくという経験は、本学に入学してくる学生にとっては、きわめて大きな意味を持っている。

(2) 学習を通じたつながりの構築—白川の「基礎ゼミA」の成果と課題

上記のことに加え、ここでは白川の指導の特徴について、教育内容の側面から考察してみよう。

参観させていただいた授業で見ることでできた活動は、「自己紹介」(第3回)と「樟蔭」をキーワードにした報告と討論(第12回)であった。これらはいずれも、自己のプレゼンテーション能力や研究力量の向上を目指した活動という意味をもつだけではない。それだけではなく、他者への興味・関心を引き出す活動として意味づけられている。

「自己紹介」の授業の際に、共通の枠組みとしてワークシートを活用していることを取り上げてみよう。この授業では各個人が趣向を凝らした自己紹介をすることに重きをおいているのではなく、ワークシートの活用それ自体が、白川のゼミにおいて学生たちへの以下のような呼びかけになっている。すなわち、自己と他者との同じところと違うところへ目を向け、耳を傾けるようにすることが大切であるというメッセージを含んだ活動なのである。

同じことは、「樟蔭」をキーワードにした取り組みに対しても指摘することができよう。この活動においては、日本文化史学科の学生として、「歴史的なものごとを見つめる」ことや「資料を読み取る」こと、「読み取った事実に基づいて討論する」ことを経験しながら学んでいくことが目標とされていたと思われる。この活動もまた、共通のテーマを設定することで、樟蔭に対する自己のまなざしと他者のまなざしとの同じところと違うところを意識させやすくしようとしたものとして評価しうるのではないだろうか。

もう一つ特筆すべきことは、白川の「基礎ゼミA」に参加している学生たちが、「なぜ」という問いかけを発していることである。樟蔭の校章を調べた学生に対して、『樟』の文字が校章に入っているものと入っていないものがあるのはなぜか「戦争中、校章に使われている菊の花が一時的に桜に変更されたのはなぜか」「なぜ桜が採用されたのか」という問いかけは、本学の歴史に迫ることに留まらず、日本の近代史の探究にも通じる重要な問いかけである。

なぜこのような問いかけを学生が生み出すことができたのか。一つには、レジュメ作成において具体的な史料を引用、紹介することが徹底されていたことが考えられるが、さらには、議論のなかで白川がくり返し「質問」と「疑問」を出すように学生たちに要求していたこと、また疑問を出すために必須の思考方法としての「比較」を、「基礎ゼミA」の最初期から大切にしていたことなどを挙げることができるであろう。

先に引用した「なぜ」の問いが出された後、学生たちは自分の頭で考え、自分の考えを表明し、交流していくという意味で、明らかに質の高い集団の様相を呈していた。ここにも、私たちが「基礎ゼミA」を運営していく上での重要な手がかりがある。すなわち、学問の入り口であるからこそなおさらに、学生たち自身が問いを生んでいくこと、その問いを追求していくことの知的な楽

しきを実感させていくことが重要なのである。

白川実践に関して、あえて課題を挙げるならば以下の2点を指摘することができよう。

第一は、共同作業の構想という課題である。共有課題として「樟蔭」をキーワードに設定したからこそ、9人のゼミ生それぞれの報告に基づいて描かれた「樟蔭」を、ジグソーパズルのピースを組み合わせるかのように、樟蔭の全体像として描き直してみるという活動を構想する可能性があったのではないだろうか。共有課題だからこそなおさら、まとめの活動として、参加者全員で明らかにしてきた「樟蔭」像を手がかりにしながら、「樟蔭とは何か」を共同で描いていくことには、検討されるべき価値がある。

第二には、この「基礎ゼミA」を通して得られた学習の成果と関係性の深まりをもとにして、自主的に学び合っていく場を学生たち自身が構築していけるように援助していくことも必要ではないだろうか。別のところで言及したように¹⁵⁾、本学に集う学生は、自分たちの居場所を必要としている。その彼女たちに学習を通してもつながりうることを伝えていくことは、私たち教師にとって大きな意味をもつ。

(福田)

4. インタビュー調査を通じた白川実践の検討

(1) インタビュー調査の概要

白川の「基礎ゼミA」の実践をさらに検討していくために、学生の視点からとらえ返すことを目的として、受講生にインタビュー調査を行った。調査の概要は以下の通りである。

日時：2006年7月28日（金） 3限

場所：白川研究室

調査対象：白川担当の「基礎ゼミA」受講者9名（全員）

質問者：福田、藤澤、小森

インタビュー調査の概要について、簡単にまとめてみたい。

問1：白川先生の「基礎ゼミA」に参加してきたなかで、印象に残っていることは何ですか？

答え：記念館を見学したこと／記念館見学の際に、卒業生（終戦の年に卒業）の方の話を伺えたこと／樟徳館を取り上げたビデオを視聴してノート・テイキングの練習をしたこと／「大正の女学生」(DVD)を視聴した後、KJ法を使って「問い」を考えたこと／自己紹介に取り組んだこと／ゲーム感覚でノリノリで授業に臨めた

問2：白川先生の「基礎ゼミA」に参加して、「よかったな」「身についたな」と思うところは

何ですか？

答え：要約の仕方やレポートの書き方、レジュメのまとめ方、発表の仕方を学ぶことができた（1年生の春学期にこれができる「得した」気分）／レポートやレジュメの書き方、まとめ方についてのプリント（前年度までの授業の遺産）が役に立った／樟蔭のことが学べた

問3：白川先生の「基礎ゼミA」に参加して、「もっと学びたいな」と思うようになったことは何かありますか？もしあれば、その内容について教えてください。

答え：樟蔭学園創設期の教員の「その後」を知りたい／開校時の校則や学生たちの様子をもっと知りたいが、史料が少なくこれ以上発展的に学んでいくことができない／新たな疑問が浮かんでも、他の受講生が発表してくれて学ぶことができた／発表の際の説明の仕方等をもっと知りたい

問4：白川先生の「基礎ゼミA」に参加して、「これはイヤだった」と思うところはありますか？

答え：研究室の空調の臭いが気になった／発表の際、質問に対する答えを考えるため頭がフル回転して、集中することが要求されるので、授業後に疲れが出る（これに対して他の受講生から「いいことじゃん！」との声が挙がる）／自分が発表者じゃなくても、質問をしないといけないので、単に聞いているだけではすまない

問5：この授業が「必修」ではなく「選択」だったとして、白川先生の「基礎ゼミA」を後輩にも勧めますか？

答え：他人に勧めることはできない（楽ではない／課題に取り組んでいる時はしんどい）／基礎ゼミが何をするのかわからなかったからこそ参加できた（初めから内容を知っていたら避けて通りたい）／ノリで話しているだけだったから楽な面もあった／レジュメの作り方等がわからないのであれば、白川先生の「基礎ゼミA」で苦しい思いをしてやってみる価値はある／やっている時はしんどいが、やった後は達成感を感じることができる

問6：みなさん方にとって、こうした「基礎ゼミA」のような授業は必要だと思いますか？

答え：友だちと仲良くなれたり、友だちの知らなかったところを知ることができたりしたのでよかった／レポートやレジュメの書き方が鍛えられたのでよかった／1年も基礎ゼミを受講する必要はないのではないかと（受講するなら春学期だけで十分）／学外に出かけてみたい（実際に自分で見て、感じた方が頭に入る）／樟蔭のことを知ることでよかった

問7：「樟蔭」を統一テーマにして取り組んだことについてはどのように考えていますか？

答え：範囲を絞っているほうがやりやすい

→史料の情報が交流できた／各個人の興味のある分野で発表を行った場合は、自分に興味があれば「フーン」で終わってしまう／樟蔭ならば、自分が在籍していることもあって考えてみようという気になる

(2) 白川実践からみる初年次教育の可能性と課題

上記のようなインタビュー調査の結果に基づいて考察するならば、次のことを指摘することができよう。

まず第一に、「基礎ゼミA」は学生の居場所づくりに大きな意味をもっているということが挙げられる。このことに関して、自己紹介のような他者を知り合うことを主眼に置いた活動への取り組みだけでなく、同じ課題に取り組み、活動を共有していくなかで、学生の居場所が構築されてきた点に注目しておきたい。

第二には、学生から達成感という言葉が出たり、「授業後の疲れ」を肯定的にとらえたりすることから推測されるように、学生たちもまた、知的に充実した時間を求めていることが挙げられる。このことは、日本語の単なる読み書きのトレーニングに終始するような授業への潜在的な批判であると考えられる。私たちに突きつけられている学生たちからの学習要求として、受けとめる必要があるだろう。

さらに第三には、「樟蔭」という統一テーマの有効性である。このことは、範囲が限定されているからこそ逆に学生たちによる学びと関係性の深まりを導き出しているとも考えられる。できるだけそれぞれの受講者が自分のこととして考えられるようなテーマを設定し、他の受講生と共に追求しながら学習を進めていくことが、大きな効果をもたらすことを押さえておく必要があるだろう。

以上のように、白川実践から「学生の居場所づくり」「知的な充実感を味わえる取り組みの構想」「統一テーマの設定」という3つの視点を受講生のインタビューから導き出すことができた。

(福田)

おわりに

「基礎ゼミA」において目指されるべき日本語力の向上は、単なる個別の表現技術の習得ではない。日本語の表現は私たちの思考の構造そのものであり、一つのテーマに基づいて表現を鍛えることが彼らの思考の質を鍛えることにつながらなくてはならない。他方、日本語のコミュニケーション力を教室内で向上させるという側面から見ると、白川のとくに第1回～第3回の授業内容、藤澤・福田の分析、また学生のインタビューとその総括から明確に見えてきたのは、ことばを使う教授者と学生、または学生同士の関係性を、教授者がかなりの程度設定し保障する必要があることである。この関係性を保障することこそが「基礎ゼミA」に求められてきた「オリエンテーション機能」をはじめ様々な機能の根本にある。白川の「基礎ゼミA」実践のように、学生が生き生きとして日本語活動に取り組み授業として効果をあげるためには、日本語を通して知的

な充実感をもたせる側面と、学習者間の関係性を構築する側面の両方のバランスがとれて初めて可能になるのではないか。

「ゆとり教育」の世代が大学に入学するようになり、初年次教育の持つ役割はますます重要になる。今後の検討として、本学の他の教員が担当した「基礎ゼミA」の実践を検討すること、さらに他大学の初年次教育の実態を調査することで、本学における初年次教育の課題をさらに明確なものにし、その検討の成果を将来的な本学のカリキュラム改革に反映させる必要があるだろう。

(小森)

註

- 1) 平成19年度からの新しい教養科目構想では「基礎ゼミ」は廃止され、学科によって必要な場合にのみ、専攻科目として大学への導入教育を行う科目を個別に立てることになる。
- 2) 「基礎ゼミ」構想は、2000年度以前にも幾度となく議論されたが実現には至らなかった。
- 3) 設置から4年を経過して、各学科の「運用方法」に関しては実際にはかなりばらつきがある。また、内容についても、各学科において、「日本語の運用（読解、ノートの取り方、レポート・論文作成、プレゼンテーション）」「専門への導入教育」「大学生活入門」「情報検索法」「図書館の利用」「アドバイザー制度」等の項目で、重点のおき方に差がある。
- 4) 説明に際しては、既述の基礎ゼミの目標やテーマ、および第1表の「授業予定」欄の内容等を記載したプリントを配布した。
- 5) 株式会社ディスコ製作。本学就職課より受講生分の提供を受けて使用。この冊子は、その説明書きによれば、本来就職活動を開始する学生が、自己PRを考えるのに資するため、自己を振り返る手段として利用することを目的として作成されたものとのことである。
- 6) 樟徳館は、樟蔭学園創立者森平蔵氏の旧宅。昭和初期を代表する和洋折衷の住宅建築として知られ、2000年には、国の登録有形文化財となった。
- 7) 虹ねっとわーく「昭和の名建築 樟徳館一般公開」（東大阪ケーブルテレビ、2004年10月放送、15分間）
- 8) NHK教養特集「映像の証言：大正の女学生」（1976年放送、45分間、学園所蔵DVD『樟の葉蔭に』vol. 1所収）
- 9) 2006年5月10日～13日の間、一般公開された。
- 10) 課題とした文献リストは、大テーマを「女子教育」とし、受講生にはその範囲内で小テーマを設定させて、作成させた。
- 11) 過去に今期と同じテーマで行った基礎ゼミにおいて、ある受講生が報告のために作成したレジュメ。
- 12) 「まとめレポート」では、授業での報告を基に、不十分であった点や、その後の調査・検討で明らかになった点を補い、レポートとして完成させることを求めている。
- 13) 自己評価と相互評価は、報告をその場限りのものとしないうための試みであるが、その効果については未だ検証作業を欠いており、不本意ながら不明とせねばならない。
- 14) この点については、福田敦志・有田節子・小森道彦・白川哲郎・藤澤良行「大阪樟蔭女子大学における

授業改善の可能性と課題」『大阪樟蔭女子大学（学芸学部）論集』第43号、2006年3月、179－191頁所収を参照のこと。

15) 同上論文参照。

（本稿の作成のために、大阪樟蔭女子大学平成18年度特別研究助成費の一部を使用した。）

資料1

2006年度 春期 基礎ゼミ 相互評価カード 月__日__報告

2006年度 春期 基礎ゼミ 自己評価カード

報告者

月__日 報告題名

(1) レジュメ

①報告で設定した対象について、調べが行き届いていたか？

- 4 よく調べられていた 3 おおよそは調べられていた
- 2 もう少し調べられるのではないか 1 もっと調べる必要がある

②調べた内容に関して、その要点が的確に整理され、報告を聞いている者に解りやすく記述されていたか？

- 4 解り易く整理、記述されていた 3 報告に必要な程度には整理、記述されていた
- 2 もう少し整理すれば、解り易くなったであろう 1 内容が未整理で、解り難かった

(2) 報告、および質問に対する応答

③主題として設定した対象やそれについて報告者が調べたことがらなど、報告の内容が理解できたか？

- 4 理解できた 3 おおよそは理解できた
- 2 解らないところの方が多かった 1 ほとんど理解できなかった

④レジュメに書いてある内容や口頭による補足は、解り易く説明できていたか？

- 4 いずれもたいへん解り易かった 3 レジュメの説明は解り易かった
- 2 口頭での補足は解り易かった 1 いずれももう少し詳しく説明して欲しかった

⑤報告者は、質問に対して、調べたことがらをもとに、的確に答えられたか？

- 4 的確に答えられていた 3 答えてはいたが、内容が解り難かった
- 2 答えが質問とかみ合っていないかった 1 答えられていなかった

(3) 報告の仕方(質問に対する答え方も含む)に関して、改善した方が良いと思ったことを、アドバイスしてあげて下さい。

(4) 報告の内容に関して、ゼミの時間では質問では質問できなかったことがあれば、書いて下さい。

(1) レジュメ

①報告で主題として設定した対象について、十分に調べましたか？

- 4 十分に調べた 3 ある程度は調べられた
- 2 もう少し調べられたように思う 1 もっと調べる必要がある

②調べた内容に関して、その要点を的確に整理し、報告を聞いている人たちに解り易く記述できましたか？

- 4 記述できた 3 整理は出来ていたと思うが、記述に説明不足があった
- 2 もう少し整理すれば、もっと理解してもらえたように思う 1 できなかった

(1') レジュメの作成に関しての反省点

(2) 報告、および質問に対する応答

③主題として設定した対象やそれについて報告者が調べたことがらなど、報告の内容について、参加者に理解してもらえたと思いますか？

- 4 理解してもらえた 3 おおよそは理解してもらえた
- 2 理解してもらえなかったところが多い 1 ほとんど理解してもらえていない

④レジュメに書いてある内容、口頭による補足などについて、解り易く説明できましたか？

- 4 いずれも解り易く説明できた 3 レジュメの内容は解り易く説明できた
- 2 口頭での補足は解り易く説明できた 1 いずれももっと詳しく説明すべきであった

⑤質問に対して、調べたことがらをもとに、的確に答えられたと思いますか？

- 4 的確に答えられた 3 一応答えたが、解り難かったかもしれない
- 2 質問とかみ合った回答ができなかったように思う 1 ほとんど答えられなかった

(2') 報告、および質問に対する応答に関しての反省点

(3) 報告の内容に関して、ゼミ参加者からの質問を受けて気が付いたこと、および報告を行って自ら気が付いたことなどを書きなさい。加えて、それら気が付いたことを踏まえて、報告後に残された課題であると考える点を指摘しなさい。

(4) 今回の報告を行っての全般的な感想